

2018年3月11日川越教会

よい出会いに感謝して

加藤 享

[聖書]マルコによる福音書14章3～9節

イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家において、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粹で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。そこにいた人の何人かが、憤慨して互いに言った。「なぜ、こんなに香油を無駄遣いしたのか。この香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに。」そして、彼女を厳しくとがめた。

イエスは言われた。「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときに良いことをしてやれる。しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではない。この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もってわたしの体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた。はっきり言うておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」

[序] ナルドの香油を主の頭に注いだ女性

今日は私の**牧師退任感謝礼拝**をして頂いておりますことを、心より感謝いたします。先ず、56年にわたる牧師生活を締めくくるに当たりまして、今日示されている聖書箇所から、**メッセージ**を汲みとることにいたします。

主イエスは、大切な**逾越しの祭**を都エルサレムで過ごすために、弟子たちと共に、**ろばの子**に乗って入城されました。そして先ず神殿の境内から商売人を追い出して、神殿を**祈りの家**に相応しい所とされました。そして集まった人々に、説教を続けました。**祭司長や律法学者たちは**、このイエスの言動を目の当たりにして、何とか計略を用いて、捕えて**殺そう**と計りましたが、大勢の群衆が騒ぎ出すといけないので、祭が終わってからにしようと決めました。

さて火曜の日が暮れて、**水曜日**になりました。ユダヤの一日は日没から日が変わるのです。主イエスの一行は、郊外のベタニア村の**らい病人シモン**の家で、**夕食の席**に着いておられた時のことです。一人の女性が、非常に高価な**ナルドの香油**が入った**石膏の壺**を持って来て、それを壊して、香油を全部**主の頭**に注ぎかけたのです。

香油は小瓶から一滴・二滴を振りかけて、使うものでしょう。それを壺を割って全部一度に、主の頭に注いだのですから、どんなに**強烈な香り**が、部屋中にたちこめたことでしょうか。

食卓を囲む**弟子たち**の中から、**憤慨の声**が起きました。「なぜ、こんなに高価な香油を**無駄遣い**したのか。この香油は300デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに。」労働者300日分以上の収入です。厳しい非難に、この女性は思わずその場にうずくまってしまったことでしょう。

しかし主は弟子たちをたしなめておっしゃいました。「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。**わたしに良いことをしてくれたのだ。**」「この人はできるかぎりのことをした。つまり前もってわたしの体に香油を注ぎ**埋葬の準備**をしてくれた。はっきり言うておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」

そうですね。2000年経った今日も、此処、日本の川越の町でも、このように語られています。皆さんは、この出来事から、どのようなメッセージを読み取られましたか？

[1] 先の先まで見据えておられる主イエス

労働者が一年間、汗水流して得る金額です。しかも香水は女性にとっては特に**貴重な宝**でしょう。もしかしたら、いざという時に役立てなさいと親から与えられていた、**お守り**のような壺だったかも知れません。その宝を、彼女は どうしてこのように、**無駄遣い**と非難されるような使い方をしたのでしょうか。

ここに、主に対する彼女の**一途な思い**が込められていますね。一体どのような恵みを、主から頂いたのでしょうか。**ヨハネ福音書12章**では、墓に葬られた**弟ラザロ**を、墓の中から甦らせてくださった主に、姉の**マリア**が、食事の席の主の足もとにうずくまり、**主の足**に香油を塗り、**自分の髪**でその足を拭った記事が記されています。

かけがえのない弟を若くして失い、墓に葬って4日もたちながら、**墓まで向いて、生き返らせて下さった主の恵み**の奇跡に対する感謝ですね。恐らくマルコ、マタイ福音書が記すこの女性も、同じような**大きな恵み**を頂いたのでしょう。主がベタニア村に来て下さったと知って、自分の**深い感謝**をどうしても表わそうと、主が食事中にもかかわらず、後からそっと近寄り、大切な宝を

このような形で主に捧げたのでした。確かに、貧しい人への援助も大切です。でも彼女は**ひたむきな思い**に駆られて、とにかくイエスさまへの感謝を表わしたかったのです。そしてその心を、主は**優しく受けとめて下さった**のでした。

この時主は、二日後の金曜日に迫った、**ご自身の十字架の死**をはっきりと見据えて居られました。そして翌日即ち**木曜日の最後の晩餐**の席上では、パンを裂き、杯を配り、「これはわたしの体である」「これはわたしの血である」とおっしゃいました。そして食後には、**ゲッセマネの園**で苦しみ悶えて祈られました。しかしその時でもペテロたちは、居眠りして居ます。主から何度も**予告**されていながら、最後まで**十字架の死**を理解できなかった弟子たちでした。私たちが主イエスの**十字架の救い**を、なかなか信じられないとしても当然ですね。

このような弟子たちを後に遺して、主イエスは、お言葉通りに、**金曜日の朝9時に十字架**につけられ、午後3時に息を引き取られました。安息日の**土曜日**が迫る夕方になりました。そこでアリマタヤの議員**ヨセフ**が、主の遺体に油を塗る暇もなく、急いで自分の墓に葬ったのでした。弟子たちは皆、姿を隠してしまいました。

しかし主は、このような事の成り行きを、**既にはっきりと見極めて居られた**のです。ですから、水曜日が始まり、らい病の人シモンの家で夕食をなさった時にでも、一人の女性が大切な**ナルドの香油**を主の頭に全部注ぐと、「この人は、**前もって**わたしの体に香油を注ぎ、**埋葬の準備**をしてくれたのだ」と感謝して、受けとめて下さったのでした。

先の先まではっきりと、事の成り行きを見極めて、救いの御業を**進めていかれる主イエス・キリスト**、そのキリストにご自身の御心を現わして、救いの御業を進めてくださる**天の父なる神**、そして私たちに信仰を与えて、一人一人の日常生活で働いて下さる**聖霊の御業**を、感謝したいと思います。

[2] 私の人生を導いた出会い

私は**1932年5月4日**に3人男兄弟の次男として、東京で誕生しました。小さい時から**やんちゃ坊主**で、私が外に出て行くと、近所の子供たちが逃げ散ったそうです。小学校6年の時に肋膜炎を患い1年休学、北海道に疎開して2度目の6年生を村の小学校で送って居る時に**敗戦**。すると二学期になって、**教科書全部**の不適切な箇所を、習字の墨と筆で塗り消す作業をさせられました。こんなに間違っていたことを教えられていたのかと愕然とし、時代が変わって

も**変わらない真理を学ばねば**という思いが、心の底から湧き上がってきました。

東京に帰り、中学に入ると、友達と**読書会**をつくり、本と一緒に読みあさりしました。**聖書**も手にしましたがよく分かりません。すると友人が自分の通っている**目白ヶ丘バプテスト教会**に連れていってくれました。そして牧師や宣教師の説教や人柄から、心の養いを豊かに受けて育ちました。一方学校では、食糧難で午後の授業は無く、暇にまかせて野球をしているうちに、**野球部**に入って熱中し、結核を再発させて高校2年の時に**大咯血**。長い療養生活を余儀なくされました。そして、親に心配と迷惑のかけ続ける**わが身の罪深さ**を痛感し、罪の赦しを求めて、**19才**の8月12日に**バプテスマ**を受けました。

軍人、野球選手の道を絶たれた私は、学校の**教師**になって、人のお役にたとうと思いました。でも生徒は、2～3年で他の教師の手に渡さなければなりません。「そうだ、牧師になれば、生涯を通じてお仕え出来る」と思い始めました。その時、貧しい家に育ちながら、牧師になろうと苦学している教会員が、突然病気で亡くなりました。彼に敬意を寄せていた私は、葬儀の時に「主よ、私が彼の遺志を継ぎます。**牧師にして下さい**」との決心を与えられました。そして牧師と教会の承認を得て、目白での教会生活を継続しながら、東京神学大学で6年間学び、1962年4月、**目白ヶ丘の副牧師**として、牧師生活のスタートを切りました。**30才直前**でした。また牧師夫人からは、教会の附属幼稚園の教師をしていた**喜美子**をすすめられて、互いの将来の希望を語り合い、結婚しました。

しかし尊敬してやまない大牧師と良い教会員仲間を守られた**豊かな教会生活**に、**富める青年**そのものになっている自分を見出し、**貧しくならなければ**との思いに強く駆られて、ゼロから始める**開拓伝道**を志願しました。でも幾ら訴えてもその道は開かれず、主は、札幌教会行きをお示しになりました。悩んだ末に、**伝道**とは主がお命じになる所で、主の御心に従って働かせていただくことだと気付かされ、1964年のクリスマス後に、**札幌教会に赴任**しました。

丁度、バプテスト連盟が**全年齢層の教会学校**の発足に取組み始めた年です。そこで皆と準備を重ねて、小学科、中高科、青年科、成人科を、礼拝を挟んで発足させ、小学生から大人まで**全年齢層が一緒に礼拝を守る教会**を目指しました。また幼稚園の父母にも、聖書・讃美歌を買っていただき、幼児科の時間に**両親礼拝**を行い、我が子と一緒に日曜朝のひと時を、教会で過ごして頂くように働きかけました。「**日曜は家族揃って教会へ**」というブリキの看板を地域に数

多く掲示しました。

更にたくましい男子信者を育てるために、幼稚園ホールを利用して**剣道場**を開き、卒園した小学1年生を中学3年まで**9年間**、週2日夕方に稽古を行い、1968年から25年間に670人の剣士を育てました。条件は日曜の教会学校出席です。これも**幼稚園児の祖父**が、**剣道範士**だったご縁からです。私自身も一緒に稽古しているうちに、シンガポールに赴任する時には、**剣道教士7段**になっていました。その他、児童文庫、音楽教室、女声コーラスグループ、料理グループ、ユースセンター、不登校生の居場所のコイノニア学園等、教会員皆で諸活動を繰り広げて行きました。

こうして50年かけて、地域社会に無くてはならない教会を建て上げようとしていましたら、**シンガポールへの宣教師**という**お召し**の聲が、心に響いてきたのです。連盟の国外伝道委員長として、アジア諸国を視察して回り、宣教師を送り出す祈りをしていた時のことです。我ながら驚きました。祈りに祈った末に教会に申し出て、**3年**がかりで了承を得て、**1995年3月**に札幌を離れ、**5月**にシンガポールへ赴任しました。

東南アジアの中心都市に身を置いて暮らすことによって、初めて、アジア諸国の人々を痛めつけた日本人の罪の深さ、**戦争犯罪の大きさ**を、痛切に知らされ、愕然としました。そして在住日本人のための**国際日本語教会**の礼拝が生まれました。また日本人学校で日本人同士剣道の稽古をしているうちに、シンガポールの若者たちも集まって来たので、**大学、高専に剣道部**が生まれました。この貢献で、シンガポール政府は私に**永住権**を与えてくれました。しかし日本の連盟から72才を超えたからと**帰国命令**が出て、**2005年1月**に不本意ながら帰国しました。そして世界宣教のアップीलのため全国巡回2年を終え、老後をシンガポールに戻って暮そうとしましたら、**川越教会**からの強い要請を受けて**2007年1月**からお仕えすることとなり、今日に至った次第です。

[3] 主の導きのもとに

墨でいたる所を黒く塗りつぶした**教科書**を手にして、本当の**真理**を学ばなければと肝に銘じた経験が、やがて読書会で私を**キリスト教会**に結びつけてくれる友人との出会いを生みました。一年休学した体なのだから過激な運動は避けろと医者に言われていながら、元気にまかせて野球に打ち込み、**長期療養**の身となりました。その**愚かな振る舞い**で苦しんだ末に、やっと自分の罪深さを痛感し、悔い改めの**バプテスマ**を受ける者にされました。更に、貧しさの中で牧師

になろうと苦学している教会員の死が、**牧師**になって彼の遺志を継がなければという決意を、私に与えてくれました。

目白での**恵まれた副牧師生活**に気付き、貧しくならねばと**開拓伝道**を求めましたら、札幌教会へという導きになりました。札幌でどうして剣道に打ち込んだか。小学校時代の高学年**担任の先生**が剣道3段で、武士道の覇気に溢れ、体育の時間に剣道の基本を叩き込まれたからです。先生は敗戦後に責任を感じて教師を辞め、故郷に引きこもってしまわれました。この出会いが、私の心を剣道に結び付け、シンガポール時代にも、大きな働きとなったのでした。剣道は身命を主君に捧げる**武士道精神**の根幹でした。礼節を重んじ、心身を鍛錬して、国家社会に仕えていく人格形成を目指します。**自己中心**を第一とするシンガポールの青年には、心を揺さぶられる魅力となったのでしょう。小学校時代の教師との**出会い**が、シンガポール社会でもお役に立つ奉仕をさせて下さったのでした。

私が**川越教会**に結ばれたきっかけも、**一人の姉妹**との出会いによります。シンガポールからの帰国命令が出ると、直ぐに川越教会から**牧師招聘状**が送られてきたのです。何故この私をといふかりながら読んでみますと、署名教会員の中に、50年前の目白時代に私が担当した中高生会の生徒の名があったのです。私の心に**川越教会との結びつき**が生まれました。でもその時は、帰国後2年間は全国報告の責任がありますので、招聘をお断りしました。

しかし気になるので、奉仕予定のなかった**クリスマス**に川越教会に出席してみましたら、**8名の礼拝**でした。そこでシンガポールに戻るのを1年遅らせて、**2007年1月に臨時牧師**となり、牧師探しをしましたが見つかりません。「今は川越教会に仕えなさい」という御心に聞き従い、**2007年10月に牧師招聘決議**をお受けしました。10年たちました。喜美子が老弱の体になりなりましたら、昨年9月末に、近所の**ケアハウス主の園**が私たち夫婦を快く迎え入れてくれたのです。実に申し分のない日々を過ごさせて頂いています。このような**老後**を見据えて、主は私たちを、シンガポールにではなく、川越に結びつけて下さったのですね。

【結】 わが身を主に委ねる

今日の聖書が語っているように、主イエスは、ご自分の**十字架の死と復活**とその**後々**までも、はっきりと見据えて、弟子たちを導き、ご自分の**使命**を全うなさいました。それに比べて、私たちは何と、**先を見通せない者**でしょうか。

身近に主に従った弟子たちですら、そうでした。でも彼らは、復活の主に出会って、やっと主の御心に従って生きる信仰者になりました。その主イエスが**私の救い主**として、私をも導いて下さっているのです。大切なのは、**主から離れずに従い続ける**ことですね。

この女性は、高価なナルドの香油の壺を割って、**全部**、主の頭に注ぎしました。**自分の一切**を主に捧げたのです。主は喜んで、その心を受けとめ、**意義ある使い方**として下さいました。私たちも主を信じて、**一切を主に委ねる**ならば、主は私たちをも、**永遠の命の祝福**へと、導いてくださるのです。

ですから、自分が大切にしているものを、**全て主に捧げる**ことです。**我と我が身**を主に委ねることです。主は必ずこの私を受けとめて導き、**有意義な人生**を送らせて下さいます。たとえ愚かな間違いをしてしまっても、その罪を赦し、**万事を善きもの**にして下さいます。私は、自分のこれ迄の歩みを振り返り、自分自身をそっくり、そのまま主にお捧げし、主の導きに従って歩むことこそ、**意義ある生涯を送る秘訣**だと、申し上げたいと思います。

お祈りします。主よ、今朝の特別な礼拝を感謝いたします。この様な者をも見捨てずに、その時その時に出会いを与え、お導き下さいました恵みを証させて頂きました。あなたに従い続けた信仰をお与え下さった深い恵みに、ただただ感謝で一杯です。主よ、ここにお集り下さったお一人お一人、また私をお支えくださったお一人お一人の上に、あなたの祝福が豊かに在りますようお願いいたします。私を育てて下さった目白ヶ丘教会、札幌教会、旭川東光教会、シンガポール国際日本語教会、そして川越教会の上に、祝福が豊かに在りますように。主よ、戦争をやめさせて下さい。平和をお与え下さい。救い主イエス・キリストの御名によって、お祈りします。 アーメン

加藤 享 略歴

- 1932年5月4日 誕生
- 1951年8月12日 目白ヶ丘教会にて受浸
- 1960年3月26日 目黒喜美子と結婚
(3男2女をいただく)
- 1962年3月 東京神学大学修士課程修了
- 1962年4月 目白ヶ丘教会副牧師就任
- 1965年1月 札幌教会牧師就任
- 1994年 旭川東光教会牧師兼任
- 1995年5月 シンガポール派遣宣教師として出立
- 1996年8月 シンガポール国際日本語教会礼拝開始
- 2005年1月 帰国 2年間全国巡回報告
- 2007年1月 川越教会臨時牧師就任
- 2007年11月 川越教会牧師就任
- 2018年3月31日 川越教会牧師退任